

妊婦のSASに関心を

愛知医科大「鼻マスク」治療の有効性強調 塩見教授

睡眠で講演会

眠っている間に呼吸が一定程度止まる睡眠時無呼吸症候群(SAS)。十秒以上の呼吸停止が一時間に五回以上起こるため、血液中の低酸素状態が続き、起きてからも極度の眠気や頭痛などが起こる。最近若い女性のSAS患者も増えており、愛知医科大学睡眠医療センター教授の塩見利明氏は「今、非常に問題視しているのが妊娠との関連」と語る。

塩見氏は、宮野湾市のラグナガーデンホテルで九日、夜開かれた「第三回沖縄睡眠呼吸研究会学術講演会」で講演し、その中で妊娠時

患者がここ数年増えてきた」と語る塩見氏。肥満の場合、付いた脂肪で上気道が狭くなり、睡眠時にのどや舌の筋肉が沈下すると、上気道がふさがり呼吸ができなくなる。肥満した女性が妊娠すると、さらに体重が増えるため、重度のSASになることもある。

塩見氏は、来院する重度のSAS患者に流産を繰り返す女性が多い、生まれきた子どもが発達障害だったりする例があることを問題視。SASによる低酸素血症が胎児に悪影響を与えている可能性に着目し、二度の流産歴があるSAS患者の妊婦に鼻マスクから空気を送り、強制的に上気道を広げるCPAP(鼻マスク式持続陽圧呼吸装置)治療を施すことで、女性が無事に正常児を出産した例を報告した。

妊婦の睡眠時無呼吸が胎児に与える影響を説明する塩見利明氏＝宮野湾市のラグナガーデンホテル



これから関係者に関心をもちてもらふ必要がある。CPAP治療でひよっとしたら百人に一人、千人に一人の子どもを救えるかもしれない。母体を守ることはできるが、少子化時代の大事な子どもを、脳障害なくいかに生まれるようにするかを睡眠医療は考える時期にきた」と関心を促した。